

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13938

研究課題名（和文）重度肢体不自由児者きょうだいの障害者との将来展望：家族システムの視点から

研究課題名（英文）Future Prospects for Severely Physically Handicapped Siblings with Disabilities
:From a family systems perspective

研究代表者

高野 恵代 (Takano, Yasuyo)

愛知淑徳大学・心理学部・准教授

研究者番号：70735274

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、重度肢体不自由児者（以下、同胞）の健全なきょうだいが同胞の将来をどのように捉えているのか、家族関係の視点から検討した。結果、家族システムおよび両親と同胞の結びつきの強さは家族成員間で一致していたが、この三者間の結びつきの強さが、両親で同胞を支えるという構図を維持していることが示された。また、面接調査からは青年期の段階では同胞の将来のケア問題を先送りし、家族間で共有しないことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の知見は、障害者家族の支援を検討するにあたり、家族の関係性（家族システム）の視点から検討したことに意義がある。同胞ときょうだいが青年期にある段階では同胞の将来について漠然とした不安はあるものの、具体的なケアプランを検討する家族は見られず、問題を先送りする傾向がみられた。よって、老障介護問題に関する意識を家族間で共有する重要性が示されたといえる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how healthy siblings view the future of severely mentally and physically disabled persons from the perspective of family relationships. The results showed that the family system and the strength of ties between parents and peers were consistent among family members. However, the strength of the ties among the three parties indicated that the composition of the parents supporting the handicapped person was maintained. It was also shown that in the adolescent stage, future care issues of the disabled person are postponed and not shared among family members.

研究分野：臨床心理学

キーワード：障害者家族 きょうだい 家族システム 老障介護問題

1. 研究開始当初の背景

(1) 障害者のきょうだいに関する研究

高齢化社会において、障害者家族も介護される側(障害者本人)と介護する側(主に障害者の両親)が共に高齢化する「老障介護問題」が生じている。治療技術の進歩と医療体制の整備により、重度障害があっても長寿命化は可能となった。そのため、障害者の高齢化に伴い、重度障害者家族に対する臨床心理学的理解と支援は喫緊の課題である。

そこで、高齢の両親に代わって障害者を支援する役割を担うと期待されるのが、きょうだいである。近年はヤングケアラーとしてその存在が注目され始めたが、これまで、きょうだいの特徴については、年長きょう代いは代理の親役割を担わされることが多く早熟化の傾向がみられること、年少きょう代いの場合は出生順位をくつがえす役割の逆転が起こるといった知見が示唆されてきた(Lobato, 1983 他)。これらの研究結果から、きょう代いは良くも悪くも障害者の影響を受けて発達していることが考えられる。なお、障害の程度が重度になれば、きょうだいのケア負担感も大きくなると言われているが(Hastings, Kovshoff, Ward, Espinosa, Brown, & Remington, 2005)、きょうだい自身が負担感等、何を危機として捉えているかは明らかになっていない。

(2) 障害者家族の関係性に着目する試み

障害者家族に限らず、どの家族にも必然的な発達の危機と偶発的な危機があり、2種類の危機が複合した場合に問題解決が困難になる(河野, 2005)。また、家族間では家族構造の変化や家族成員の成長が求められる(岡堂, 1991)。とくに障害者家族はストレス度が高いといわれるが、家族の凝集性が高いことでストレス対処がうまく行えていること(Kazak & Marvin, 1984)、障害者の療育や保育、ケアによる家族の結合が深まること(中村, 2011)が示唆されている。これらより、家族のライフサイクルと家族の発達段階に着目すること、家族の否定的側面だけでなく、肯定的側面も捉える必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、「老障介護問題」の解決の一助として、重度肢体不自由児者(以下、障害者)の健全な兄弟姉妹(以下、きょうだい)が障害者の将来をどのように捉えているのかを、家族関係の視点から具体化する。きょう代いは障害者と母親の間で意識的にも無意識的にも心理的葛藤を抱きやすい(高野・岡本・神谷, 2015 他)。そこから、きょうだいの心理的葛藤は、親子・家族・社会といった関係性の中で生じると考えたが、関係性の視点からきょうだいの問題を実証的に捉えた研究や、家族成員の一員である父親を含めた研究はみられない。

以上より、親が高齢化し始める時期にある青年期きょう代いが、将来的に障害者を支えていく問題についてどのように考え実践しようとしているのか心理的側面に着目し、また、そこに父親を含めた家族間の関係性がどのように影響を与えるのかを家族システム論の知見から検討する。以上から、きょう代いが障害者とともに豊かに生きていくために、きょうだいと障害者家族に対する臨床心理学的理解および支援の方向性を探る。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者

本調査は障害者の家族会Zを通して調査協力者を募集した。2018年より2021年にかけて、計6組の家族から協力を得た(父親参加2家族)。障害者ならびにきょうだいの年齢は青年期以上であり、障害種や程度は身体障害者手帳等で確認した。なお、本研究では障害者の両親(父母)、きょうだいの家族成員3名を対象としていたものの、父親の同意を得られず母ときょうだいのみ参加となるケースや、面接調査のみの実施に限定するなど他の調査に協力が得られない場合もあったが、それらも分析対象に含めることとした。

(2) 調査手続き

調査は、アンケート調査、心理検査、半構造化面接の3つで構成され、～を対象者ごとに実施した。のアンケート調査は、日本語版FACES(草田・岡堂, 1993; 20項目, 5件法)、良好な夫婦システム評価尺度(永田, 1999; 20項目, 5件法)、両親の夫婦関係尺度(藤田, 1998; 9項目, 7件法)、親子間の信頼感に関する尺度(酒井, 2005; 子ども用16項目, 大人用8項目, 4件法)を使用した。の心理検査は、亀口ら(1992)によって開発された家族心理検査法のFIT(家族イメージ法)を使用した。FITは、家族が自分たち家族をどのような「システム」としてイメージしているかについて、円形シールを個々の家族に見立てて用紙上の枠内に配置させる動作法を用いた自己検査法である。の半構造化面接は、過去から現在に至る障害者を取り巻く環境や関係性と、将来的な介護問題に対する各家族成員の捉え方について質問した。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響により、調査は2020年より一年ほど中断した。また、調査方法も対面での実施が難しくなり、心理検査等対面での実施を想定していた調査について

は実施しないケースもあった。

(3) 倫理的配慮

調査対象者には文書と口頭で研究内容を説明し、研究参加は自由意志であること、参加・不参加によって不利益が生じない等を伝え、同意書の署名をもって研究参加への同意を得た。本研究は愛知淑徳大学心理学部倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号 2018-03）。

4. 研究成果

(1) 家族の関係性の検討

以下、健全な兄弟姉妹を「きょうだい」、障害のある当事者を「同胞」と表記する。アンケート調査とFITを検討するため、調査対象者のうち、家族成員全てが回答したケース（A 家族、B 家族）について分析を行った。まず、各尺度の得点を算出した（Table 1）。次に、FITについて、分析手続きに従って分析を行った（Table 2, 3）。

Table 1
FACES , 夫婦システム, 親子間の信頼, 夫婦関係, 親子関係各尺度得点

尺度	A家			B家			
	父親	母親	きょうだい	父親	母親	きょうだい	きょうだい
FACES 凝集性	45	35	28	31	29	44	31
FACES 適応性	34	29	19	27	26	34	27
夫婦システム 凝集性	39	40		28	34		
夫婦システム 適応性	32	35		31	23		
親子間の信頼	同胞(第 子)	第1子(長女)	第1子(長女)	第3子(次男)	第3子(次男)	第3子(次男)	第3子(次男)
	きょうだい(長男)	21 (長男)	22 (長男)	(長女)	31 (長女)	22 (長女)	(長女)
	きょうだい(次男)	24 (次男)	22 (次男)	(長男)	29 (長男)	31 (長男)	(長男)
夫婦関係尺度 (9-63)			32			31	38
親子関係尺度	父親(8-32)			18			20
	母親(8-32)			20		31	29

Table 2
A 家族の FIT の結果

分析の枠組み	A家族			
	父親	母親	きょうだい1	
シールの濃さ	父親	3	4	4
	母親	3	4	3
	同胞	4	5	4
	きょうだい1	3	3	3
	きょうだい2	3	2	3
夫婦軸	子-父			
夫婦間/親子間距離	ほどほど			
占有率	似ている			
子のきょうだいとの向き	似ている			
夫婦軸ときょうだい軸の関係	ほどほど			

Table 3
B 家族の FIT の結果

分析の枠組み	B家族				
	父親	母親	きょうだい1	きょうだい2	
シールの濃さ	父親	5	5	4	4
	母親	5	3	5	3
	同胞	3	3	3	4
	きょうだい1	4	4	3	3
	きょうだい2	4	4	3	3
夫婦軸	子2-母				
夫婦間/親子間距離	似ている				
占有率	似ている				
子のきょうだいとの向き	ほどほど				
夫婦軸ときょうだい軸の関係	似ていない				

アンケート調査の結果より、家族の凝集性と適応性については、家族成員で得点に差がみられた。A 家族においては父親ときょうだい間で、B 家族においては母親ときょうだい 間での差が大きかった。ただし、親から見た子への信頼感と、きょうだいから見た夫婦関係および親子関係については、親子間でほぼ一致していた。

次に、FIT の結果より、家族成員のパワーを示すシールの濃さが成員ごとに異なっていた。A 家族では家族の中で同胞の影響力が最も強いが、位置関係をみると同胞を中心とした結びつきがあり、さらに両親と同胞の結びつきも強かった。B 家族でも両親と同胞の結びつきの強さが示されたが、B 家族では父親の影響力が強く、位置関係は家族成員ごとに異なっていた。なお、きょうだいの FIT から、きょうだいと同胞間の距離と結びつきの強さは適度であったが、両親から見ると結びつきが弱いことも示された。

2 家族の結果より、両親と同胞の結びつきの強さは家族成員間で一致しているが、この三者間の結びつきの強さが、両親で同胞を支えるという構図を維持しているものと思われる。対象となる家族を増やし、両親ときょうだいが取れる家族イメージを精緻に検討する必要がある。

(2) 同胞のケアに関する将来展望の検討

6 家族の語りについて、きょうだいについては、「きょうだいが同胞と関わる中でどのような葛藤を体験し、それをどのように自己に位置付けていったのか」という視点で、両親については、「同胞の過去から現在までのケア体験、将来のケアをどう考えるか」という視点で、M-GTA を参考に分析を行った。高野・岡本・神谷（2015）の分類方法に基づき、家族関係のサブシステムを類型化した後、本研究のテーマである同胞の将来的な介護問題について、きょうだいと両親間で

比較を行った。

類型化の結果、きょうだいと同胞関係においては、関係性が過去から変わらず良好な「良好型」、青年期以前は否定的な関係性であったのが青年期になって良い方向に変化する「好転型」、青年期以前から現在も積極的に関わらない「表面的関係」に分類された。どのタイプであっても、同胞の将来については「関わらざるを得ない」という意識をもち、両親亡き後のいつか訪れるときを「覚悟する」という状態が示された。また、両親の側からみると、きょうだいに「同胞のことを任せる」ことに「申し訳ない」という気持ちと、「負担をかけたくない」というアンビバレントな状態が示された。同胞の具体的なケアプラン等の内容に関する検討は、どの家族も、どの関係性でも行われていなかった。今回対象となった家族は、きょうだいは青年期(20代~30代)で、両親も現役で仕事をしている世代であり、なおかつ同胞の身体状況が落ち着いているという、とても安定した発達段階にあるために意識化されなかったと思われる。ただし、どの家族においても【同胞の将来に関する不安】は感じていたため、問題を先送りする状態ともいえる。

具体的な問題が顕在化する前の青年期きょうだいにおいては、こうした不安が生じつつも具体的な対応は共有しないことも示されたことから、不安を表出したり、共有することを意識的に避けるか否かが同胞の将来を捉える際の至点となる可能性がある。今後は、対象者数を増やしてより精緻に検討する必要がある。

引用文献

- 藤田達雄 (1998). 青年期における理科離れと母子密着の関連性に関する研究 家族心理学研究, 12, 67-76.
- Hastings, R. P., Kovshoff, H., Ward, N.J., Espinosa, F. D., Brown, T., & Remington, B. (2005). Systems analysis of stress and positive perceptions in mothers and fathers of pre-school children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 35, 635-644.
- 亀口憲治 (1992). 家族システムの心理学 境界膜の視点から家族を理解する 北大路書房
- 河野 望 (2005). 障害児者の家族に関する研究 立命館人間科学研究, 8, 15-27.
- Kazak, A., & Marvin, R. (1984). Differences, difficulties and adaptation: Stress and social networks in families with a handicapped child. *Family Relations*, 33, 67-77.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄(編) 心理検査学 臨床心理査定の基本 垣内出版 573-581.
- Lobato, D. J. (1983). Siblings of handicapped children: A review. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 347-364.
- 永田忠夫 (1999). 良好な夫婦システムに及ぼすコミュニケーション行動 愛知淑徳短期大学研究紀要 38, 1-21.
- 中村義行 (2011). 障害児の親・家族の心理と支援 中村義行・大石史博 (編) 障害臨床ハンドブック (pp.163-178) ナカニシヤ出版
- 岡堂哲雄 (1991). 家族心理学講義 金子書房
- 高野恵代・岡本祐子・神谷真由美 (2015). 重度障害者家族のきょうだい・母親・障害者の関係性の類型化 きょうだいからみた母子関係・同胞関係に着目して 家族心理学研究, 29, 19-33.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高野恵代
2. 発表標題 重度肢体不自由者家族が捉える家族イメージ：FITを用いた2家族の比較
3. 学会等名 日本家族心理学会第36回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------